

小・中・高校生の部

入賞作品

広島県知事賞

命

セミの鳴く声がする
毎日毎日、昼でも夜でも
うるさいなあ
僕は思い出す
この声は求愛の声
二週間という短い
命のタイムリミットの中の
子孫を残す
最後のチャンス
僕は一匹の
セミになつて考えた
子供の長い年月をすごし
大人の短い時間を

坂町立横浜小学校六年 中島 康貴

子供を残すためだけに鳴いて
きちょうな二週間を終わる
これほどまで

つまらない人生はない
僕は思う

セミ達は分かっているのだろうか
明日死ぬかもしれない

命の短さを

分かっているのだろうか
短い人生すべてを

産まれないかもしれない
子供にたくしている事を

僕はそんな人生
絶対にいやだ

僕は思う

うるさいなあ

でもセミにとって

それは何年も生きている
楽しい時間かもしれない

セミにとって僕は

つまらなそうに見えているかもしれない
そんなセミ達に僕は思う

今、楽しい？

それに答えるかのように鳴く
たくさんのセミ達

現 代 詩 部 門

広島県議会議長賞

なぜ

坂町立横浜小学校四年 平林 愛菜

なぜ、人は働く

なぜ、人は死ぬ

なぜ、人は生まれる

なぜ、人はわかち合える

なぜ、人はつらい事でも、…それを乗り越えられる

なぜ、動物は、かわれ、さい後まで、やさしく

くしてもらえれば、幸せなの

なぜ、人は動物をすてる

すてられる動物は、すてられる

拾われるのくり返しをつづける

動物は、すてられる事がこわい

人は、死ぬ事がこわい

人も、動物も、ほとんど、同じ事がこわいの
かもしれない
それを、この世から、どうやったら消せる

広島県教育委員会賞

さんさんと太陽が輝く日

世羅町立せらにし小学校六年 末里 亜莉沙

祖母に頼んでたんすから出してもらった、半袖の洋服

八カ月ぶりに見る夏服

衣装ケースを開けると

鮮やかな色とりどりの洋服

まるで南国の花や鳥や海のように

これは去年買ってもらった、チェックのワンピース

これは「ユニクロ」でお母さんにねだって買ってもらったTシャツ

ピンク、紺、緑のTシャツ

どうしてだろう

見慣れているはずなのに
わくわくする

どきどきする
胸が高鳴る

あつこれはアイスを落とした時のシミ
こっちはスパゲティのシミ
そういえばこの汚れは田植えの泥

一枚一枚の服から鮮明な夏の記憶がよみがえ
る

きらきらした瞳で覚えた感動

あの時にかいた汗

私を包んでいた風が再び吹く

その時の思い出を洋服は全部知っている

そして今年の夏にも思い出は作られる

思い出はこの洋服に更に刻まれる

それは私の歴史になる

夏服よ

私の成長を刻んでおくれ

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

花の教え

県立祇園北高等学校二年 養田 早紀

ある日のこと

コンクリートのひび割れに

小さな小さな芽が出ていた

誰も見向きしない芽は

一生懸命に背のびしていた

それを見ると自然に笑みがこぼれた

その姿がともけなげに見えたから

けれど同時に疑問が生まれた

なぜ一生懸命なの？

誰も見ないかもしれないのに：

すると、そつと答えた

—— 私が私らしく生きるためですよ

コンクリートのひび割れに

小さな小さな芽は花を咲かせていた

小さく白く、名もないような花は

ただただ笑っていた

それにつられ、自分も笑っていた
それと同時に疑問が浮かんだ

私はこの花のように生きている？

この花のように

誰も見ていないところでも

けなげに一生懸命に、私らしく生きている？

その問いに花は答えない、何も言わない

それに耐えられなくて

私は花から目をそらした

しばらくして

小さく白く名もない花は枯れていた

けれど穏やかだった

私はあの時、なぜ目をそらしてしまったのか

なぜ花の言いたいことがわからなかったのか

その答えを出すのは自分なのだ

だから花は答えずにただ黙っていた

いつだって生き方について答えを出すのは

他ならぬ自分自身なのだ

花はそれを教えてくれた

だから生きよう

けなげに、一生懸命に、自分らしく

これからの長い人生を歩んでいこう

現 代 詩 部 門

広島市長賞

じぶんのちからでがんばっている

世羅町立東小学校一年 多留見 明里

はじめてのすいえい。

かおつけができない。

こわくて、ないた。

あしが、ガタガタ、ガタガタふるえた。

おとうさんとおふろでれんしゅうだ。

おふろのそこに手をついて、

うーん、ばあ。

「あかりちゃん、ぶくぶくしないと、

すぐにいきがすえないよ。」

おとうさんにおしえてもらったように、

ぶくぶくばあ。

でも、わたしは、

ばあのと、すぐにかおをふいてしまう。

だから、すぐにかおがつけられない。

たいいくのじかん、

せんせいが手をもってくれた。

およぎやすいな。

おとうさんがおしえてくれたように、
みずのなかで、

ぶくぶく、いきをだして、

ばあと、せんせいの目をみた。
でも、また、かおをふいた。

きのうのたいいく。

びいとばんをもって、

ぶくぶく、ばあのれんしゅうをした。
ぶうるのよこを、

かおをふかずにいけるようになった。

ときどき、せんせいがあたまをおす。

「じぶんでいれるから、おさないでください。」
とって、

ちようせんしてみる。

ぶくぶく、ばあ。

すぐにあたまをいれて、

ぶくぶく、ばあ。

わたしは、いま、

じぶんのちからでがんばっている。

広島市議会議長賞

知りたい

呉市立横路中学校三年 中山 祐華

私は ひろしまの子
昭和を知らない 平成の子
だから 教えてもらうしかない
気付くことも ある
けれど 分からない事の方が多い

私は ひろしまの子
ここは
きれいな場所 美しい場所
きつと たくさんある
今まで 行った所もある 見た所もある
けれど 知らない所の方が多い

私は ひろしまの子
ここは

初めて 原爆の落とされた所
戦争という ひどい世界の
残ってしまった 傷
今まで たくさん たくさん
聞いた 見た 行った
だけど 知らないことの方が多い

私は ひろしまの子
平成に 生まれて
未来を作っていける
けれど
今までのことは 教えてもらうしかない
そして
そのことを未来につなげないと
いけない
でも
私に 教えることができるだろうか
すごく すごく 不安
だから 知りたい
今よりも もっと たくさん

広島市教育委員会賞

おじいちゃんとそだてたあさがお

広島大学附属小学校一年 川上 日向子

がっこうでうえたあさがおは、
まだまだ

まいあささいています。

けさは六こもさきました。

せんしゅうは

十五さいた日もあります。

わたしは

あさとよるに

「げんきにさいてね。」

みずをあげています。

あさがおは、

あお、むらさき、あかむらさき、

いろいろな いろでした。

たねのなかに、きれいないろを

とじこめていて、

きれいなはなを、

いっぱい いっぱい
さかせるぞ。

だって、だって、
いんのしまのおじいちゃんが
ながいしちゆうをたくさんたてたから、
あさがおさんがよろこんで
つるが ぐんぐん ぐんぐんのびて
三メートルにもなりました。
ひりょうもあげたら、
あさがおさんは よろこんで
ひゃっこぐらい
さきました。
そだてるひみつを
おじいちゃんが、
ひなこにおしえてくれたもの。
だから、
だいじょうぶ。

たねさん、あんしんしてね。

財団法人ひろしま文化振興財団会長賞

The ^ザ War ^{ワー}
(戦 ^{いくさ})

県立可部高等学校定時制一年 佐藤 旭

消えない記憶が今も頭の中で
叫びのように 音を鳴らし続けている
私がこの世から消えても
世界は変わらない
そう嘆く君の心は悲しみに濡れている
私がこの世から消えても誰も悲しまない
そう嘆いて消えた 僕の世界から…

毎朝目覚めるたびに 悪夢が始まるような
現実から逃げ出したくても
鎖のように纏わりついて…
眠りのない夜の街 影を落とす真昼の空
いつまで続くのか…
誰も気付いてはいないのか…?
世界がもし平和なら
きつと誰も嘆きはしないだろう
無意味に流れていく血は怒りと悲しみに

今日笑顔だった子どもたちが
明日悲しみに触れていても
世界は何もしてはくれない
戦場に向かう兵士たちは皆
何を思っているのだろうか
手にした凶器で 狂気に駆られるのか：
戦場で倒れた君は
何を思ってたのだろうか
家族もいない君は
愛を知って逝けただろうか
それを知る術はもうない：
たとえ争いが終わっても
人々は醜く嫉み合うだろう
鏡には映らない 恐ろしいほどの狂気で
無垢な子どもたちの笑顔でさえ
いつかは狂ってしまうだろう
それを止める術はもうない：
いつか子どもたちが
狂気に蝕まれることになっても
僅かな幸福を覚えていてほしい

今は居ない君が
最期に遺した言葉は
今も僕が受け継いでいるよ…